

再生可能エネルギー事業のサステナジーと芝浦工業大学システム理工学部の大谷拓也准教授の研究室などが農業用ロボットの实用化に向け、今年度から御代田町で運用試験を始めた。町を通じ農業生産法人ベジアーツなどが協力を申し出て、畑地を



ロボットに設置したカメラで、うねに沿って自律走行ができるかテストする学生ら。

御代田の畑地で試験運行 ロボットが種まき、雑草取り、野菜収穫…

試験場所に提供している。

ロボットは高さ約2m、幅約1m。自律走行でき、アーム部分を入れ替えることで、様々な野菜の収穫に対応。種まきや雑草除去にも応用できる。10月24日はパクチーと雑草の写真を読み込ませ、両者を見分け雑草だけを除去できるかテスト。2～3年以内の实用化を目指すという。

大谷准教授はロボット導入により「単調な作業を代替してくれるので、重要な部分に人員を回せる」と説明。季節雇用の労働者確保が課題という、ベジアーツの山本裕之社長。实用化されたら「置き換えられる作業は、どんどん置き換えていきたい」と期待を寄せている。